看護助手の効率的な配置と業務拡大に向けた取り組み

佐賀大学医学部附属病院　　毎熊　恵子

【背景】

医療の高度化や複雑化に伴う業務の増大などから、医療の在り方を「チーム医療」として推進実践していく中で看護助手業務の在り方は重要な課題である。当院では急性期看護補助体制加算の「25：1」を目指し、平成23年度からそれまで外部委託であったシーツ交換員をそのまま看護助手として雇用した経緯があり、年度初めは看護助手の定着が安定しなかったが平成24年4月現在で看護助手を43名まで増員している。

看護助手は各病棟に3～4名を配置したが、その各病棟から1～2名を集合させた合計10名の横断的グループが全病棟の定期シーツ交換や入退院ベッド作成を行っている。看護助手の業務指針には直接ケアなどが提示されているが、看護師はどのような患者のケアを看護助手に依頼してよいか分かりにくい等や看護助手のスキルアップ体制が整備されていない等の問題があり業務拡大に至っていない。業務担当の副看護部長として、これらの背景から看護助手の効率的な配置や業務拡大に向けた取り組みを行い、看護師と看護助手がお互い協働し「チーム医療」を行う一員として働きやすい環境を整備したいと考えた。

【実践計画】

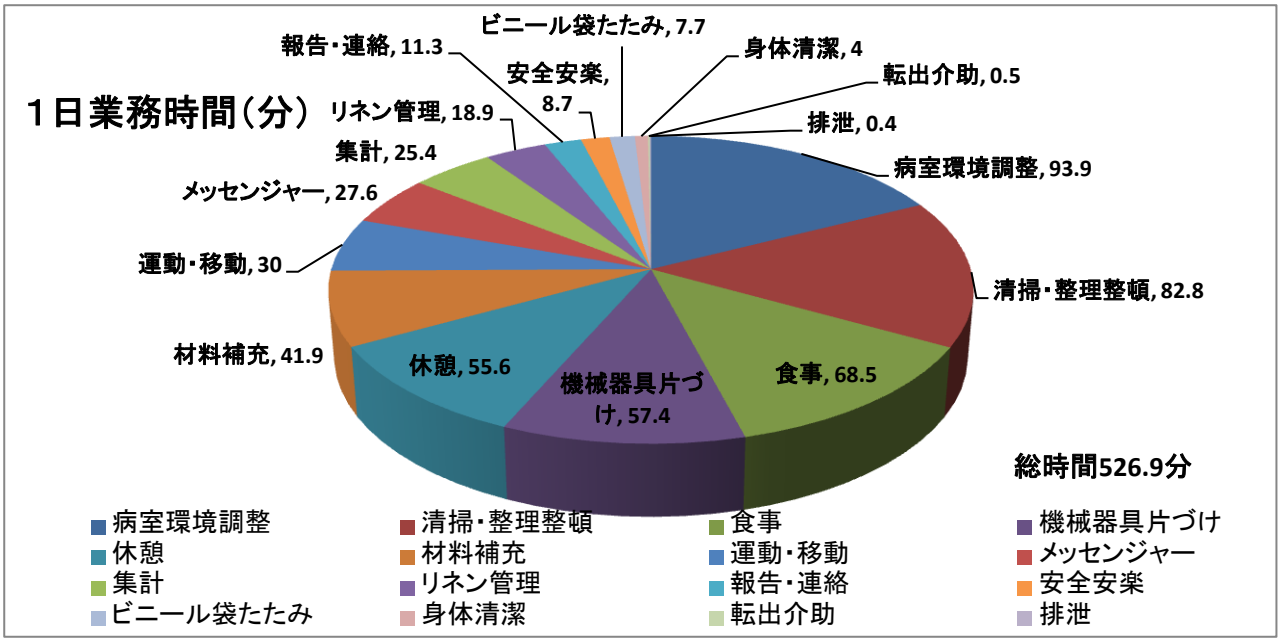
1．横断的グループのシーツ交換を廃止し、各病棟 3～4 名の看護助手で病棟の業務を行う体制へと変更する。
2．看護助手業務のスキルアップのためのプログラムの作成と看護師が看護助手へ依頼できる患者状態の基準を明確にする。
3．遅出勤務（12：30～21：00）や土曜・日曜勤務体制を組み込む。

これらを目標に実践計画を立案した。

1）看護助手業務についてタイムスタディを10月に実施し、業務の実態を分析する。その後、平成25年1月を目途に横断的グループ（シーツ交換グループ）を本来の配置部署に戻し、一部署3～4名でその部署内で看護師長の監督のもと看護助手の業務を行う。タイムスタディで分析した内容からスキルアップのためのプログラムを作成する。また、非効率な業務を把握し業務改善できる項目を洗い出す。
2）看護師が看護助手に依頼できる患者状態の基準を明確にする。
3）看護助手の中で遅出勤務ができる者、土曜・日曜勤務ができる者を把握し病棟看護師長と相談しながら勤務を割り振る。

【結果】

1. 看護部業務改善委員会で看護助手業務の96項目についてタイムスタディを8月にプレテストした後、10月1日(月)～5日(金）の5日間実施した。
2. タイムスタディの結果、看護助手1名が1日の中で多く従事している業務は、病室環境調整が最も多く93.9分、清掃・整理整頓が82.8分、食事に関する世話が68.5分、機械器具の片づけ 57.4 分であり、運動・移動に関する世話が 28.5 分、身体清潔に関する世話は 4 分、排泄に関する世話が0.4分であった。



一日の看護助手業務時間の割合（分）

3. タイムスタディの結果を平成 25 年 1 月看護師長会議で報告し、業務指針に提示している看護助手業務の拡大について再度方向性を共通理解した。また、看護助手業務の内容について看護ケアに関する業務と診療に関する周辺業務について明文化し、看護助手に依頼できる患者の基準を各病棟でも具体的に検討するよう推進した。
4. 看護助手研修は教育委員会が主催し、9 月に安全管理と感染対策について、12 月に看護助手の業務指針について、感染症の場合の環境整備、足浴の演習を実施した。
5. 平成 25 年 2 月看護助手連絡会を開催し、タイムスタディの結果と今後の業務内容について周知した。看護ケアができた看護助手の中には充実感を得られたと答えた者もいた。
6. 平成 25 年度の看護助手研修は、これまでの年 2 回から 4 回へ（4.5 時間から 11.5 時間へ）、また看護助手連絡会を年 2 回計画した。
7. 横断的グループ（シーツ交換業務）は、看護助手の配置人数の関係から現状のままとした。遅出勤務は実施に至っていない。

【評価及び今後の課題】

1. 看護助手業務のタイムスタディの結果から、患者への看護ケアがほとんどできていない現状が明らかとなり、看護ケアに関しては看護師と看護助手が協働して実施することを経年的に見ていく必要があり、経過をおって再度タイムスタディを行い評価する。また、業務内容について再編明文化したことを、各病棟でさらに具体的に整理する必要がある。
2. 看護ケアのスキルアップは、教育委員会と連携し次年度の計画を立案できた。また、同時に接遇に関する教育が必要であり、患者対応についても課題が残るところである。
3. 横断的グループ業務の廃止は、一般病棟に看護助手を 4 名配置したあと（平成 25 年 6 月を目標）実施する計画とした。効率的な配置としては、横断的な配置が良いように思われるが、看護師長の監督下に業務を行うには病棟配置が効率よく指示ができるという判断である。今後はフロアー間で業務整理を考えていくこととする。
4. 看護助手の勤務形態については、継続課題とする。